

世界遺産登録を目指す温泉津町のまちづくり

第4分科会 勝部祐治、山根啓典、花本浩一郎
山本義雄、山村賢二、和田 浩

1. はじめに

研究部会では2000年に温泉津町を研究対象として訪ねた。今回、当時色々お世話を頂いた温泉津町総務課大迫係長に再度お願いし、温泉津温泉街に着目してまちづくりの方向性を考えてみようかと計画した。温泉津町は、石見銀山の世界遺産登録を控えているとともに、2004年に伝統的建造物群保存地区に選定されたことで、まちづくりに対する機運が高まっている。今回は、温泉津町商工会青年部のメンバーとのディスカッションを行うことができた。特に温泉津町でまちづくりに取り組んでいる「温泉津ものづくりネットワーク」のメンバーに参加して頂き、世界遺産登録と伝建地区登録を温泉津町のまちづくりの最後のチャンスとして捉え、活動していることを確認することができた。

第4分科会は、6人という少数精鋭での活動となったが、行政・住民(商業者)・技術士会の3者の連携ができ、有意義な研究活動ができたと考えている。



第4分科会 参加者



商工会青年部とのディスカッション

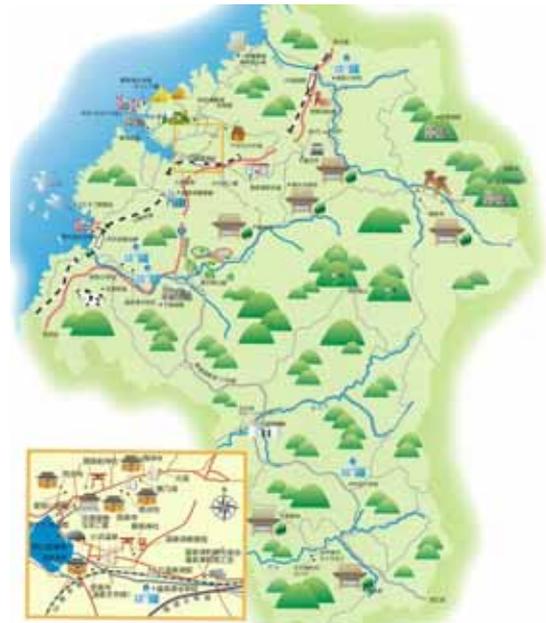
2. 温泉津町の概要

温泉津町は島根県中央部に位置する人口約4千人、高齢化率41%（人口規模は、平成12年国勢調査時点で県内59市町村の41番目）の都市である。なお、人口問題研究所の推計によると、温泉津町の将来人口は、平成27年には73%（対H12）、平成42年には52%（対H12）と大幅な人口減が予測されている。

温泉津町は、温泉と焼き物で知られる観光地であるが、平成15年の温泉津町への入込み観光客数は約14万8千人、3年前の平成12年と比較し約7万3千人（約33%減少）も減少傾向にある。一方、温泉津温泉への入込み客数は、平成15年で約5万3千人であり、平成12年と比較すると7%減と小幅な減少幅で留まっている。

また、一人当たりの市町村民所得は平成13年時点で1,932千円（県平均値2,481千円の73%）と、県内他市町村と比較して最も低い水準である。

平成17年10月には、大田市、仁摩町、温泉津町の合併により、新“大田市”として生まれ変わる予定である。



温泉津町の概要図

3. まちづくりの動き

(1) 石見銀山の世界遺産登録

石見銀山は、16～17世紀の銀生産最盛期には、海外にも多く輸出され、当時、世界の産銀量の約三分之一を占めたといわれる。石見銀山の積出港として銀山街道で結ばれた温泉津港も、世界遺産暫定リストに追加されている「石見銀山遺跡」の一部になっている。

(2) 伝統的建造物群保存地区登録

温泉津町は、道筋や川など町割りが江戸時代の末から約3百年間全く変わらず、また江戸時代後期から昭和初期の建物が混在する全国的にも貴重な町並みを残している。平成8年から、温泉街の女将（おかみ）が主体となったまちなみ保存活動が契機となり、平成16年7月6日に、温泉津伝統的建造物群保存地区（約33.7ha）が重要伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区と呼ぶ）として選定された。保存地区の分類は、「港町・温泉町」であり、日本の温泉街では唯一の指定となっている。

(3) まちづくり活動

温泉津町のまちづくり活動は、ここ2、3年でやっとスタートした状況にある。代表的な活動として、地元若手有志で構成される「温泉津ものづくりネットワーク」は、町おこしの様々な活動を通じて、商売に結びつけることを最終的な目標としており、平成16年には、京都造形大学の教授らと連携し、町内にある資源を使った町おこしがスタートした。これ以外にも、幅広い年齢層の町民を巻き込んで伝建地区のまちなみ保存活動を推進していくために、平成16年11月に、（仮称）まちなみ保存会が立ち上げられた。

4. まちづくりの主な課題

(1) まちなみ保存の懸念

伝建地区の指定が近年だったこともあり、現在、歴史的値のある建造物が取り壊され、新しい家屋に改築されたり、駐車場として整備される等、まちなみが歯抜け状態になっている箇所が見受けられる。更に、建物の所有者が県外転居により、空き家となっている所もある。このような中、如何にまちなみを保存していくかが課題となっている。

(2) 生活空間としての機能保持

建物など外見的なまちなみのみならず、その地で暮らし生活する“生きた空間”があってこそ、本物のまちなみが形成されると考えられる。そこに人々が豊かに生き続けることができる仕組みや生活空間としての整備も重要と思われる。

(3) 地域活性化

将来的には温泉津町の人口は半減し、2人に1人が高齢者となることが予測されている。地域を守り、そして地域経済を活性化するためには、定住人口のみならず交流人口の増大が重要なファクターと考えられる。

(4) 今後の観光客増大に対する受け入れ

石見銀山が世界遺産登録暫定リスト入りしてから、近年、石見銀山をツアーに組み込んだ旅行商品が徐々に始めている。既に国内で登録された世界遺産をみると、世界遺産登録前後で、観光客が1.4倍も増大している所（白川郷、五箇山の合掌造り集落の場合）も見られることから、増大する観光客に対する受け入れ体制を早急に整える必要がある。

(5) 人づくり・組織づくり

まちづくり活動はここ数年でやっと立ち上がった状況にあり、まちづくりのための人材育成、組織づくり及び組織間の交流や連携はこれからと言える。

5. これからのまちづくりに向けて

前項までの情報を踏まえて、これからの温泉津温泉街のまちづくりを地域活性化の視点から提案を行う。

(1) 温泉津温泉のストーリーづくり

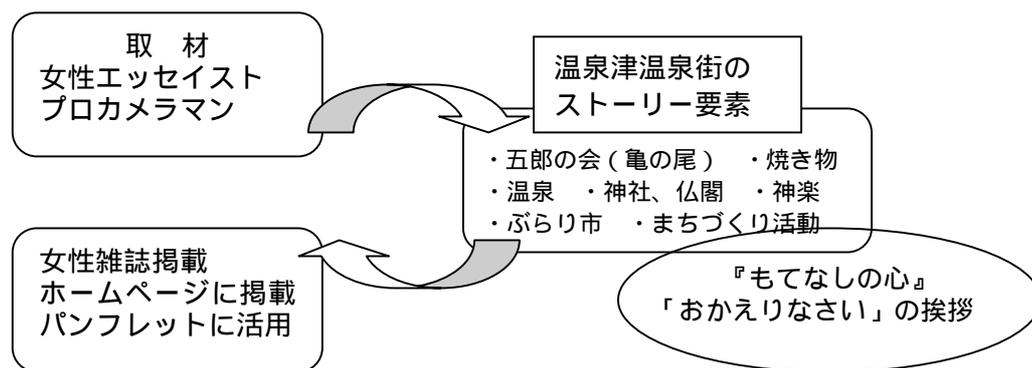
まちづくりの目標の一つとしては、「温泉津」のファンを増やし、訪れる人を増やし、宿泊客を増加させることがあげられる。温泉津温泉街は、最近のスローライフブームにマッチした街であると評価できる魅力的な街である。伝建地区登録もそれを後押ししている。

「温泉津」を魅力ある地域として発信することが、ファンを増やすことにつながる。そのためには魅力的なストーリー“物語”が必要である。魅力的な、おしゃれなストーリーを作ることによって、女性の心を捉えることが必要である。

具体的には、著名な女性エッセイストに取材をさせ、プロカメラマンの写真と共に女性雑誌に掲載することで、いわゆる“温泉津温泉ブーム”を演出することを目指す。温泉津温泉のおしゃれなストーリーの要素としては以下が挙げられる。

- ・若林酒造～五郎の会～
- ・温泉津の焼き物（ディスプレイに気をつかう）
- ・温泉津温泉のお湯
- ・神社、仏閣
- ・神楽
- ・ぶらり市
- ・ものづくりネットワークのまちづくり活動 など

このようなストーリーを支えるのは、温泉津温泉街の人たちの『もてなしの心』である。ここに住む人たちが、訪れる人たちに「おかえりなさい」と挨拶をかわすことを提案する。温泉津温泉のなんとなく故郷に帰ったような、落ち着いた雰囲気は「おかえりなさい」が良く似合うと思う。



(2) 街並みづくり

温泉津温泉のストーリーづくりを支えるのが、「街並みづくり」である。伝統的建造物群保存地区としての街並みはそれなりに魅力があるが、観光地としてその魅力を十分に引き出していないと言える。そのために、「街並みづくり」が必要であり、具体的な提案を以下に行う。

特徴ある物販店の出店

来訪者が求めるものの一つに、良い買物ができるお店がある。石見銀山の森地区での「ブラハウス」、津和野の「海老屋」などが特徴ある物販店のイメージとして挙げられる。一つの魅力のあるお店が、街並みを変えていく力を持っている場合がある。森地区との連携を図る中で、「ブラハウス」の温泉津店の出店を呼びかけることも考えられる。

質の良い店が温泉津温泉街にあることで、その手法を各店、各宿泊施設が取り入れ、焼き物の販売などのディスプレイにも気をつかうようになり、街全体がグレードアップすることが期待される。温泉津ものづくりネットワークの小川会長が企画している伝建地区の助成金を活用した居酒屋のオープンも、このような出店の動きの先鞭となると思われる。

歩きたくなる街並みの創出

街全体を来訪者への“もてなしの場”と考えた歩きたくなる街並みの創出を図る。

具体的には、以下に示す事項を提案する。

- ・ 街並みを明るくするカラー舗装化
- ・ たまり空間の創出 観光客の街歩きのひと休み場、住民の井戸端会議の場として腰掛けられる空間をつくる。
- ・ サインの整備 温泉津の地元資源である福光石を使ったサイン整備を行う。
- ・ 夜間の照明の整備 宿泊機能を持つことを活かし、夜間出歩いても楽しい街並みの演出を図るため、照明の整備を行う。

(3) 交通まちづくり

まちづくりを交通面から捉えた「つなぐ」、「めぐる」の2つの視点をもとに提案を行う。なお、これらの施策は、社会実験を通じて、具体化することが望ましい。

「つなぐ：街へのアクセス」国道9号から自動車で来訪者する人がほとんどと考えられ、石見銀山の世界遺産登録後には、大型観光バスの出入りも増える可能性もある。温泉津温泉街までのアクセス道路は幅員が狭く、生活道路としても機能していることから、事故や交通混雑を回避するため、温泉街フリンジ部に駐車場を設置（確保）し、他の手段に乗り換えてもらう案が妥当と考えられる。ただし、乗換え抵抗が軽減できるよう、乗り物自体の魅力アップ、乗り継ぎ方法（乗り継ぎ時間や場所）等を充分検討する必要がある。

「めぐる：街なかの移動や回遊」温泉街での来訪者の移動は、徒歩、自転車、あるいは公共交通で行うものとし、特に、レンタサイクルや人力車、コミュニティバスを活用する。魅力ある街並み散策を交通面から支援する。

6. おわりに

本年度の研究では、温泉津町の商工会青年部とのディスカッションや現地踏査を通じて、温泉津温泉街エリアを対象に、今後のまちづくりの方向性について検討を行った。

今後は、新“大田市”の動向やまちづくり活動の進展を踏まえて、温泉津町のまちづくりの継続的な検討（フォローアップ等）を行うとともに、広域連携方策（大田市や仁摩町との連携、森地区との連携）や新たな交通インフラとなる仁摩温泉津道路を活用した地域振興策（三瓶山やアクアスそして石見銀山を含めた周遊観光施策、道の駅やICなど交通拠点におけるサイン計画やPR活動など）についても検討を行っていきたい。